

令和4年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



中学校の部 最優秀賞

「大きい世界の話を教室で」

会津若松市立第五中学校

3年 渡部 未来

4731人。この数は、2022年6月27日現在、ロシアによるウクライナ侵攻で亡くなったとされている民間人の数である。この数は、私が住む会津若松市の10歳から14歳の人口4913人（2022年7月1日現在）に迫る数である。2月24日からの4ヶ月余りで、私たちの住む町の小学5年生から中学3年生までの全員とほぼ同数の命が、恐ろしい紛争によって奪われたのである。

私は日々更新されるウクライナでの犠牲者の数を一定の割合で増えていく数字としか見ていなかった。しかし、あるとき、その数を自分たちの住む町に当てはめて考えることで、その数がいかに残酷で、悲惨なものかに気付いたのだ。私はそのことを、誰かと共有したいと思い、すぐに家族に話した。

「多くの命が奪われる紛争はすぐにでも終わってほしい。」

「紛争では両親が犠牲になり、残された子供たちも被害者だ。」

など、家族みんなでこの紛争の悲惨さを語り合った。そして、自分たちには何かできないかを家族で話し合った。しかし、私は紛争を止めることもできないし、子供たちを救うことは現実的には難しいと考えていた。そんなとき、父が「グローバル」という考え方を教えてくれた。

・グローバルとは、

グローバル（地球規模の、世界規模の）とローカル（地方の、地域的な）を掛け合わせた造語で、「地球規模の視野で考え、地域的な視野で行動する」という考え方である。

私はこの「グローバル」という考え方を知ったとき、遠い国で起きているウクライナでの紛争が少し身近になったと感じた。つまり、ウクライナでの出来事はグローバルな問題だが、ローカルな視点で自分にも何かできないかと考えるようになったのだ。

その視点を持ったとき、私の眼には急にいろいろなものが見えてきた。コンビニのレジ横にある募金箱。大型スーパーで行われている募金活動など、今まで素通りしていたものが、ウクライナとつながる活動だったことに気付いたのだ。

「私も何かしてみたい。」

これまで自分には何もできないと考えていたが、グローバルという考え方に出会い、また、募金活動をしている方々の存在を知ったとき、私の心は大きく揺さぶられた。7月31日、さっそく私は家族と相談をし、以下の課題を決め、自分にできることを可能な限り考えてみた。

[課題]

ウクライナでの紛争により両親を亡くした18歳以下の子供が、自ら収入を得られ

るようになるまでの支援は何ができるか。

[自分にできること]

(1) セーブ・ザ・チルドレンを通じた募金を行う。

「利点」

使い方が限定された募金で、課題解決につながる。

「欠点」

お金は自分で得たものばかりではなく、親の力を借りなくてはならない。

(2) ウクライナ産の食品や製品を購入する。

「利点」

生活に必要なものを国産や他の外国産から置き換えるだけなので実行しやすい。

「欠点」

ウクライナの支援にはつながるが、課題解決に結びつくかは不透明である。

(3) ウクライナ情勢に関心を持ち、友人と話題にする。

「利点」

経済的負担がなく、取り組みを継続することができる。

「欠点」

課題解決に結びつくかは不透明である。

私はこの3つの取組について、実行できるものから順次行っていきたいと考えている。

(1)、(2)は今からでもできることなので、夏休み中に実行する。また、(3)に関しても2学期に学校が再開したら実行したい。

私が(3)の取組を思いついたのは、東日本大震災からの復興の真ただちにある福島県の現在と重ねて、ウクライナの復興を考えたからだ。私は震災が起こったとき3歳だった。そのため、震災のことはよく覚えてはいない。しかし、毎年3月11日は震災が起こった日として、テレビで特別番組が組まれたり、新聞記事に大々的に震災の記事が取り上げられたりする。その日ばかりは、日本全国、全世界の人々が福島に注目をし、「復興」の後押しをしようという機運が高まる。私もこれらの報道を見て、福島での復興の現状と課題を確認することができている。しかしながら残りの364日は私を含め多くの人が震災のことを意識せず日常生活を送っているのではないか。震災の影響でふるさとに帰ることができず、未だ避難生活をしている人がいるにもかかわらず。

私は自分自身の反省として、困難な状況にある事物に関心を持ち、話題にしていくことが支援につながると考えた。例えば、私を含め多くの人々が震災について関心を持続できれば、復興に向けた取組が止まることはないし、もしかしたら政府等を動かし、復興を加速させることができるかもしれない。これを私が立てた課題に当てはめて考えると(3)の取組を継続していれば(1)、(2)の取り組みを継続することができるのだ。数年後、私が経済的に自立できたとき、募金もできるし、ウクライナ産の食品なども購入することができる。これは、ウクライナの復興を後押しし、課題解決につながるのではないか。

グローバルという考え方で行動を起こしたとしても、すぐには結果に結びつかないだろう。しかし、この考え方を友達や家族と共有し、その取組を継続していけば、きっと結果につながると考える。私はそう信じて、これからも自分にできることを継続していきたい。

参考文献

国連へようこそ 国連広報センター <https://www.unic.or.jp>

福島県の推計人口（福島県現住人口調査）

「グローバル時代の社会科授業の創造 ～その理論的実践的探究～」

新潟県社会科教員学会

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン <https://www.savechildren.or.jp>